

2012年3月26日

公益財団法人 笹川記念保健協力財団
理事長 紀伊國献三 殿

施設名 社会福祉法人 聖ヨハネ会

代表者 理事長 渡邊元子



2011年度ホスピス緩和ケアナース養成研究事業助成
に係る報告書の提出について

標記について、下記のとおり報告いたします。

記

- 1 研究・研修事業 2011年度ホスピス緩和ケアナース養成研究事業
- 2 期 間 2011年 4月 1日 ～ 2012年 3月31日
- 3 報 告 書 I 事業の目的・方法
- II 内容・実施経過
- III 成果
(上記I～IIIをA4縦判・横書 6,000字程度にまとめる)
- IV 収支報告
①助成金の主な用途(人件費以外は領収書等の証憑書類を添付)
②当該助成金に関わる部分の決算書「写」
(貴機関の全会計決算書でなく、当該助成計上部分のみで可)
*決算期の関係で2012年3月19日(月)までに「写」を提出できないときは提出予定日を記入
(提出予定日: 2012年 6月 日)
- V 添付書類
当該施設の研修カリキュラム(パンフレットでも可)

2011年度 ホスピス緩和ケアナース養成研究助成報告書

聖ヨハネホスピスケア研究所所長

山崎 章郎

聖ヨハネホスピスケア研究所研修担当

近藤 百合子

I 事業の目的・方法

本事業の目的は近年急増しているホスピス・緩和ケア病棟および緩和ケアチーム、在宅でのホスピス・緩和ケアを提供することのできる看護師の養成、ケアの質の向上を図ることである。

方法は日本看護協会ホスピス緩和ケアナース養成研修を受講した研修者に、笹川医学医療研究財団によって指定されたホスピス・緩和ケア病棟にて3週間の臨床研修を実施し、講義での学びを統合しホスピス・緩和ケアに対する知識・技術を深めるプログラムである。

聖ヨハネホスピスケア研究所は聖ヨハネ会 桜町病院 聖ヨハネホスピスと連携しながら、当研究所看護師を専任の研修担当者として配置し、臨床研修が実りあるものとなるようにしている。

II 内容・実施経過

1) 第1週

- ①ホスピスケアにおけるチームアプローチの重要性を理解するためにホスピスボランティアを3日間体験する。
- ②1週目に1日かけて、当研究所独自に聖ヨハネホスピスで行なわれている「家族・遺族ケア」「ホスピスコーディネーターの役割」「ボランティアの役割とトレーニング」「スピリチュアルペイン」「セデーションのガイドライン」「看護師の役割」「音楽療法について」などのテーマでそれぞれの担当スタッフが講義を行っている。

2) 第2、3週

看護師について看護師実習

- ① 看護師に同行し患者・家族へのケアのあり方を1対1で学ぶ
- ② 回診に同行し医師と患者・家族とのコミュニケーションの実際と、回診における看護師の役割を学ぶ
- ③ ホスピス外来の実際を学ぶ
- ④ 訪問診療の実際を学ぶ（研修期間中に対象者がいる場合）
- ⑤ ホスピスケアにおける質の維持、向上のため継続的に毎日行われている各種カンファレンスに参加し、ホスピスケアにおけるチームのあり方やカンファレンスの意義を学ぶ
- ⑥ アロマセラピーや音楽療法などの補助的療法の実際を学ぶ
- ⑦ 週一回行われている入退棟検討会に参加し、どのようなプロセスで入院が決定されていくかを学ぶ

- ⑧ 以上のほかに病棟勉強会、毎月の行事、看護学生・一般市民を対象に行っている〈2時間セミナー〉、遺族ケアとして行っている〈虹の会〉など桜町病院 聖ヨハネホスピスで行っている事柄で、研修者が希望される場合には参加し実際に学ぶ場を提供している。

Ⅲ 成果

1. 実習参加者14名に対するアンケートの結果

1) 実習期間について 適当：14名

<適当>

- ・慣れてきた時期位で終了したので適当と判断した。
- ・研修終了後に臨床に復帰しても直ぐに勘をつかめる長さと思え、ちょうど良いと思った。
- ・通勤が大変だったため、3週間でちょうど良かった。
- ・もっと、学びたいと思うが、働きながら学ぶには良い長さと思う。

2) 実習の時期 希望通り：12名 どちらともいえない：2名

<希望通り>

- ・集中講義が終了してすぐだったので、時間が空かずスムーズだった。
- ・講義の時期から近かったため、講義と実習をむすびつけやすかった。
- ・希望の月に実習を行えたが、学内研修後、あまり時間が空きすぎない方が良かった。

<どちらともいえない>

- ・学内講義から時間が空きすぎた。

3) 実習プログラムについて 大変良い：12名 良い：2名

<大変良い・良い>

- ・とても満足のいく内容だった。
- ・研修を受けなければ気づけなかった視点を見出せ、実施レベルまで噛み砕いての指導は大変勉強になった。
- ・看護師以外の職種の方からも学ぶことが出来た。

4) 実習の受け入れ体制について 大変良い：12名 良い：2名

<大変良い・良い>

- ・忙しい時間を割いて丁寧に優しく受け入れて貰えた。
- ・研修生という立場を超えて、一個人としての対応や指導を受けることができた。
- ・忙しさがわかるからこそ、迷惑をかけているのではないかといたたまれない気持ちになることがあった。
- ・とても親切に、優しく、安心して実習ができた。質問もしやすかった。
- ・一人での実習に不安はあったが親切にして頂いた。

5) 実習の指導体制について 大変良い：13名 良い：1名

<大変良い・良い>

- ・マンツーマンで色々なスタッフに指導して貰えたことや、質問には的確に回答が得られとても良かった。
- ・疑問に思ったことは躊躇せず確認できる環境だった。
- ・指導内容が統一されていて分かりやすかった。
- ・毎日、実習の最後に振り返りとアドバイスの時間があったので、頭の中を整理することができた。また不安なく実習ができた。
- ・終了後のミーティングから、自分の意見を人に伝えることの訓練ができたように思う。

2. 提出されたレポートから研修修了者の感想などを抜粋

《緩和ケア病棟で勤務している研修生》 4名

- ・忙しい業務の中でもちょっとした配慮で心地よいと感じてもらえるケアが提供できることを学んだ。
- ・終末期患者さんは、死への向かっていく過程の中で決して絶望などのマイナスの感情ばかりでなく、喜びや嬉しさ、心地よさ、幸福感を味わうことで次への楽しみにつながり、希望を見出せることができるということを学んだ。
- ・家族ケアとは、日常の中でのさりげない労いの声かけやスキンシップ、休息への配慮などが家族への癒しにつながることで、何より患者さんのことを一生懸命ケアしている我々のことをみて、「大切にしてもらっている」という感覚が、家族へのケアにつながることを学んだ。
- ・実際に行われている看護は自施設と大きな違いは感じられず、自分たちの日々行っていることを肯定的に考えることができた。他施設を見ることで自施設の良い面もわかり、それをスタッフに伝えていくことでモチベーションにもつなげていきたい。
- ・死生観については、数年前まではただ悲しみと喪失のイメージだけだったが、決してそれだけではなく、次への旅立ち、苦しいことからの解放もあるということに考えに変化していることを再確認できた。

《一般病棟で勤務している研修生》 9名

- ・当初、ボランティア体験をする意味がわからなかったが、ボランティアの大切さ、医療スタッフでは担いきれない患者さんの QOL を支えるという点で大切な役割を果たしていることがわかった。
- ・私たち一般病棟の看護師もホスピス緩和ケア病棟と同じようなケアをがん患者さんに提供しなければならぬと痛感し、まずは自分から姿勢を正し、ここで学んだことをスタッフに伝えていくことが課題。
- ・研修を進める中で、患者さんの価値観を大切にし、患者さんと家族が何を望み、その為になにができるかを一生懸命にチームで考えていること、そして謙虚な姿勢で患者さんと家族を大切に支えていくことの大切さを実感した。
- ・ホスピス緩和ケアを講義で学んだ際は理想論ではないかと感じていたが、実際にスタッフに同行し実習することで、患者さんの価値観を大切にし、その人がその人らしく最後の時まで過ご

せるように援助していくという、理想としていた看護はあるということを感じることができた。そして家族のみならず遺族ケアも行っていくことが看護師の役割だと実感した。

- ・ケアの目標は症状緩和のみではないこと、関わっていくプロセスに意味があることに気付かされた。今後は患者さんから逃げず、最後までそこに留まる思いで寄り添い、共にいることから始めようと思う。
- ・外科病棟において急性期の患者さんを看ながら終末期の患者さんを見ることは難しく、終末期患者さんと向き合う時間がとれない現状ではあるが、その現状への改善策を考えていくことを今後の課題としたい。
- ・全人的ケアをするにはチームの存在が大きいことがわかり、まずは医師とカンファレンスが持てるように医師への依頼や時間調整を行ってみたい。
- ・緩和ケアとは看護の原点であり、がん患者さんの終末期を支えることだけでなく、どのような患者さんにも適応し、適応させるべきものと感じた。
- ・私にとってホスピスケアとは、「人と人が関わりを持つ上で大切な心を持ったおもてなしのケアであり、看護していく上で基本的な関わりである。その人がその人らしく過ごしていけるためのケアでありたい」と思う。マインドがしっかりしていれば、一般病棟でもできることは膨らんでいくのではないかとも思った。
- ・チームケアについて考えさせられることが多かった。医師と看護師の関係性が上手くいっていない自施設の現状の中で、医師に対する諦めの気持ちもあったが、自分自身の努力への怠慢さにも気付かされ、まずは自分を含め看護師から情報を共有したいという思い、患者さんについて一緒に考えていきたいというメッセージを伝え、地道に実践していくことを課題にしたい。
- ・ホスピスケアの在り方については、ホスピスだからできていることなのかと、実習初日には感じていたが、徐々にケアの本質を知ることができ、ホスピスとか一般病棟などという枠はなく、そこにいる患者や家族の思いやニーズは、どのような状況や環境の中でも変わりがなく、患者や家族の望むケアを現状の状況や環境とどう折り合いを付けていくかによるということ。そのためには看護師や医師など関わる人の中にホスピスマインドがどれだけ定着し浸透しているかによるのではないかとも思った。
- ・チーム員全てのコミュニケーションスキルの高さを知ること、自分自身に足りないこと、苦手としていることが明確になり、日々、人と関わりながらコミュニケーションスキルの向上に励んでいきたい。

《緩和ケア・一般病棟の混合病棟で勤務している研修生》 1名

- ・ホスピス緩和ケアを行う者として、病院で規則を守りながらも、規則に囚われ過ぎることなく、患者の自由な生活を支援していきたい。また、ホスピスで働く看護師として、死生観をもち、常に振り返りを大切にする行動、自分自身が精神的に豊かであるように考えていくことが大切と思う。

以上のように本研修は研修参加者にとって、講義で学んだ内容を臨床現場で確認・統合でき、更に現場だからこそ実感できるホスピス緩和ケアにおけるチームのあり方やそのケアの進め方、コミュニケーションのあり方などが体験できていることがわかる。また、看護師としての専門性を高めると同

時に人間性の向上にも役立っていることがうかがえ、本研修は十分な意義が認められる。

看護師同行による見学研修に対しては、研修生より、自己の看護を振り返ることや、ホスピス緩和ケアをより理解することができ、見学研修だからこそ多くの患者さんと接し、一つひとつの対応が学べたとの評価が得られている。ただし、実際に受け持つことがない点を考慮し、継続した流れの中で患者さんを見ることができるよう、同行する看護師を通してその日に担当している患者さんについては可能な限りケアのプロセスや状況の変化が分かるように配慮していくことが必要といえる。

今年度の研修生の背景としては、管理職を担う方は数名で、中堅看護師として病棟スタッフの教育に携わる研修生が多く、各々に課題を持って研修に臨まれていた。今後も研修生のバックグラウンド、自施設に戻ってから求められている個々の役割などに合わせ、研修における目標が達成できるよう配慮し、特に一般病棟勤務の研修生に対しては、自施設に戻ってからの実践可能な課題やケアの方法、工夫できる点にまで気づけるよう心がけていきたい。さらには、亡くなるがん患者の約9割は一般病棟であることを前提に、一般病棟および緩和ケアチームにおけるホスピス緩和ケアを実践できる看護師を育成していくことが重要となり、今後の課題といえる。

また、今回初めて4ヶ月に渡り研修生が一人という時期があり、受け入れ施設側としては研修生とのコミュニケーションを密に取り、実習のみならず研修期間中の生活面における配慮にも心がけた。成人教育の一環であり、自己責任の基での研修ではあるが、研修生の中には「心細かった」「見知らぬ土地での生活に一人で不安だった」などの感想も聞かれていることから、今後も研修生が単身の際は、より細やかな対応に心がけていきたいと考えている。